

今週の為替相場見通し(2024年10月21日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		148.83 ~ 150.32	149.53	147.00 ~ 152.00
ユーロ	(ドル)		1.0811 ~ 1.0936	1.0867	1.0700 ~ 1.0950
(1ユーロ=)	(円)		161.85 ~ 163.60	162.50	159.00 ~ 164.00
英ポンド	(ドル)		1.2975 ~ 1.3103	1.3048	1.2950 ~ 1.3250
(1英ポンド=)	(円)	*	193.71 ~ 196.05	195.17	191.00 ~ 197.00
豪ドル	(ドル)		0.6659 ~ 0.6750	0.6707	0.6650 ~ 0.6800
(1豪ドル=)	(円)	*	99.44 ~ 100.95	100.29	98.50 ~ 101.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 山口 朋子

(1)今週の予想レンジ: 147.00 ~ 152.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

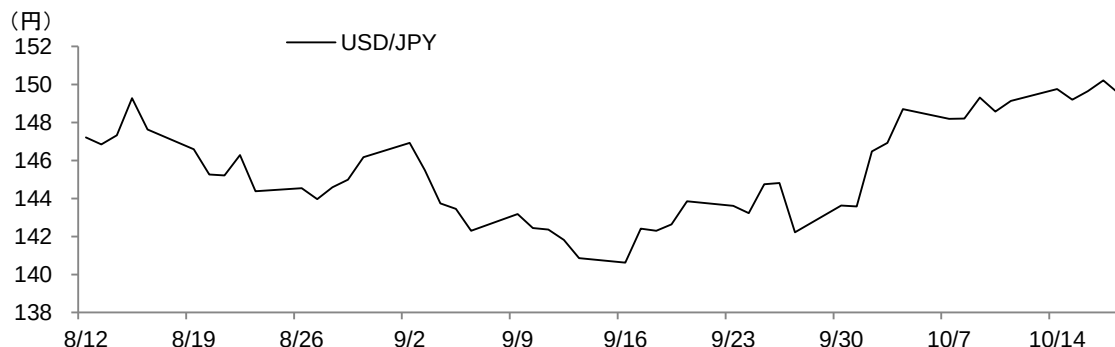
先週のドル/円は週後半に急上昇し、約2か月半ぶりに150円を突破する展開。週初14日、東京市場が休場の中、149.32円でオープン。アジア時間は動意に乏しい展開となるも、海外時間に複数のFRB高官による利下げペースに対し慎重な発言が確認されたこと、さらに米大統領選でのトランプ氏優勢報道を受け、ドル/円は150円手前まで上昇。ただし、翌15日に本邦勢が戻るとドル/円は上値重く推移。米金利低下も受け、148円台後半まで下げ幅を拡大した。その後は、米10月NY連銀製造業景気指数の予想を大幅に下回る結果に軟化も影響は限定的で、ドル/円は149円台前半まで上昇。16日には安達日銀審議委員の発言を受け上下し、週安値の148.83円を付けた後、149円台前半まで反発。海外時間は新規材料に欠ける中、149円台での推移が続いた。17日に発表された米9月小売売上高をはじめ複数の米経済指標が予想を上回る結果となると米金利上昇と共に一気に150円台に乗り、8月1日以来の高値となる150.32円まで上昇。18日には利益確定のドル売りが持ち込まれると再び149円台に下落。発表された米住宅関連指標にはほぼ反応なく、ポジション調整のドル売りが続くとドル/円は149円台前半まで値を下げ、149.50円近辺で越週した。

今週のドル/円は底堅い展開を予想する。今月初めに発表された米9月雇用統計や先週発表された米9月小売売上高の好結果を受け、Fedが早いペースで利下げを実施することへの期待が後退している。FRB高官からも利下げのペースは慎重に判断したいとの発言も出ており、年内・来年の利下げ織り込みが後退する局面では、米金利は上昇し、ドル買い優勢の展開となろう。さらに、米大統領選も引き続きドル買い材料となると予想する。トランプ氏は複数の激戦州での支持が拡大しており、勝利確率がハリス氏を上回っている。大統領選の日程が近付く中、関連ニュースに市場は大きく反応しやすい。一方で、本邦でも27日(日)投開票の衆院選を控えている。選挙前の急激な円安を避けたいため、先週の高値を超える局面では当局からの円安けん制発言にも注意したい。今週の注目の経済指標は24日(木)米10月製造業/非製造業PMI、25日(金)米9月耐久財受注、米10月ミシガン大学消費者マインドとなっている。

(3)先週末までの相場の推移

先週(10/14~10/18)の値動き:

安値 148.83 円 高値 150.32 円 終値 149.53 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替デリバティブチーム 部坂 洋太朗

(1) 今週の予想レンジ: 1.0700 ~ 1.0950 159.00 ~ 164.00 円

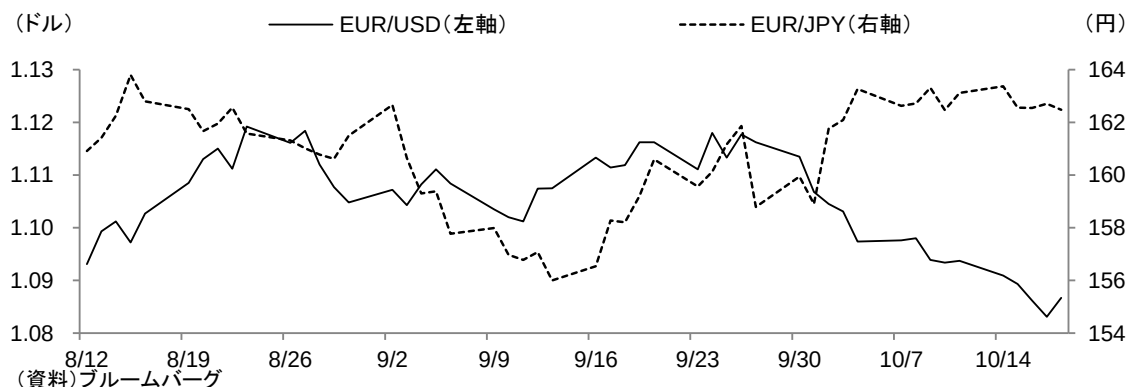
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは下落となった。週初14日、1.0924でオープンしたユーロ/ドルは、東京・米国ともに祝日で流動性の薄いなか、米国時間にウォラーFRB理事による緩やかな利下げを支持する発言を受けてドル高基調となり、一時1.0888まで下落となったがその後は1.09台まで戻して引け。15日、独10月ZEW景気期待指数の良好な結果や米10月NY連銀製造業景況指数が事前予想対比大きく下回ったことを受けてユーロ/ドルは1.0910台まで上昇するも、その後は上値重く1.0893で引けとなった。16日のユーロ/ドルは、欧州時間まで方向感のない値動きが続くも、米国時間に米株高・米金利上昇に伴ったドル買いの流れから1.0854まで値を下げてそのまま安値圏で引け。17日、ECB政策理事会では予想通り政策金利▲25bpの引き下げ発表後ユーロ買い優勢の値動きとなるも、その後のラガルドECB総裁の記者会見にて「インフレは上振れリスクよりも下振れリスクの方が高い」といったハト派発言を受けてユーロ安の流れとなった。また、米9月小売売上高や米新規失業保険申請件数といった米経済指標も軒並み予想対比良好な結果となったことを受けてユーロ/ドルは週安値の1.0811まで下落となりその後は小幅に反発して1.0831で引け。週末の18日、米国時間に発表された住宅関連指標の結果が弱い結果となったことを受けてドル売りの流れとなり、1.0867で越週となった。

今週のユーロ/ドルは、先週に引き続き軟調な展開を予想。直近発表された米経済指標は住宅関連の指標の除き軒並み良好な結果が継続していることから、FRBの11月および12月における金融政策決定会合における利下げ動向に注目が集まる中、今後の動向次第では年内の利下げ見送りおよび長期的な利下げペースの鈍化が織り込まれる可能性がある。一方で、ECBにおいては消費者物価指数の低下および製造業PMIの悪化といった状況が継続しており、リセッションの懸念も再燃している状況。引き続き来年3月までの計3回の会合においても各▲25bpの利下げを織り込んでおり、欧米の金利差は今後拡大していく可能性が高まっている。欧米の金融政策のスタンスの差が引き続きユーロ/ドルの上値を押さえることとなるだろう。今週の注目材料は、24日(木)にユーロ圏10月製造業/非製造業PMI(速報)、25日(金)に独10月IFO企業景況感指数の発表が予定されている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/14~10/18)の値動き: (対ドル) 安値 1.0811 高値 1.0936 終値 1.0867
(対円) 安値 161.85 高値 163.60 終値 162.50



3. 英ポンド

欧州資金部 神田 史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.2950 ~ 1.3250 191.00 ~ 197.00 円

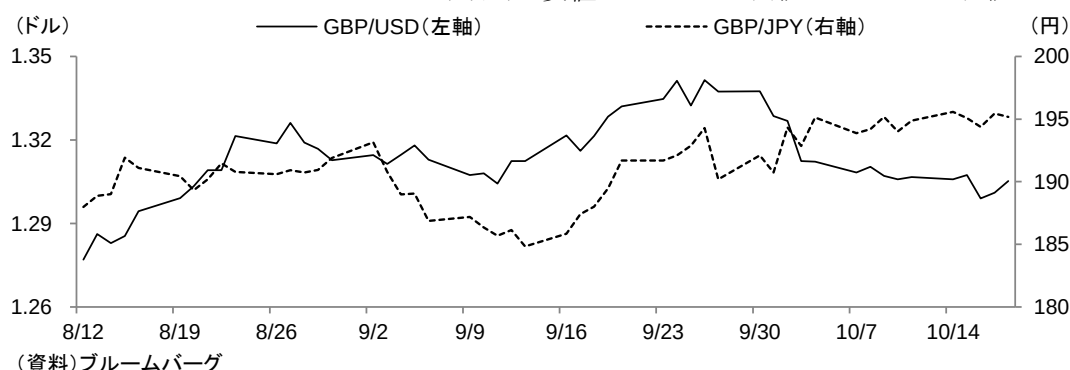
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、ほぼ横ばい。週初14日は1.30台後半で取引を開始。日米が休日の中、方向感なく1.30台で推移。15日は8月までの英雇用統計が予想対比やや堅調だったが、賃金上昇は低水準であったこともあり影響は限定的。一方で「イスラエルがイラン石油施設への攻撃を計画していない」との報道に原油価格が下落したことで原油銘柄を中心に欧州株は上値重く円高推移。ドル売りが英ポンドに波及し一時1.31台を回復も程なく下落。16日は英9月CPIが予想以上の減速となり1.30割れ。17日はECBが予想通り利下げも英ポンドへの影響は限定的だった。週末18日は英9月小売売上が大きく予想を上回る中で英ポンド堅調スタートも結局1.30台前半で週末を迎えた。対円では、ほぼ横ばい。週初195円レベルで取引を開始。週末の中国当局の景気刺激策を受けて株式はひとまず堅調推移で円安が進み、195円台後半まで買われるも、16日の英9月CPIで193円台後半まで下落。しかし、17日の米経済指標が軒並み予想を上回る中でドル/円に連れて反発し、18日の英9月小売売上後に一時196円台まで買われるも勢い続かず、195円レベル近辺でセッションを終えた。

今週の英ポンド相場は、引き続き上値重い展開を予想。英米の金利差拡大に期待した英ポンド買い持ちも熱を失う中、10月末の英予算案、11月の英米政策金利発表を控えポジションを傾けにくい状況となりそう。 (なお週末時点で、スワップ市場では米11月利下げは約9割、英利下げは約10割の織り込みとなっている。) 経済指標としては、24日(木)の英10月PMI速報値か。とはいえ英予算案の公表前で不確実性は高いため、これらにより相場の方向性が変わるほどの影響は予想しないが、上下に振れる可能性はある。一方、対円ではドル/円のボラティリティの高まりに起因する変動に留意。先週後半に前回介入以来の150円を記録したドル/円に、再び介入の観測が出だしている。米利下げ期待の巻き戻しによるところが大きいとはいえ、市場が注視しだしている以上、ドル/円チャートの節目で売り圧力が高まるセンシティブな展開となろうか。対ドルでポンドは動きにくいだけに対円ではドル/円の動きにつれた推移となりやすいだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/14~10/18)の値動き: (対ドル) 安値 1.2975 高値 1.3103 終値 1.3048
(対円) 安値 193.71 高値 196.05 終値 195.17



4. 豪ドル

金融市場部 為替デリバティブチーム 岩下 義明

(1) 今週の予想レンジ: 0.6650 ~ 0.6800 98.50 ~ 101.50 円

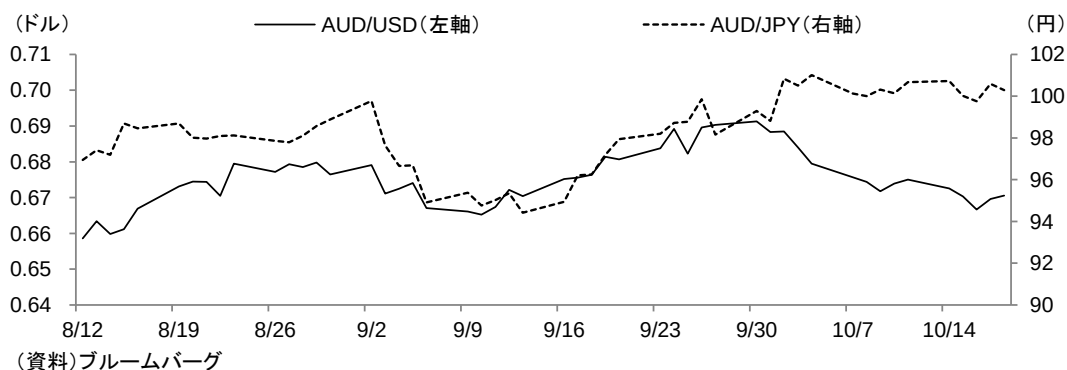
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

14日、豪ドルは0.6730近辺で取引開始後、日本・米国が休場で薄商いの中売り優勢。週末の中国財務相による記者会見で景気刺激策の具体的な規模に関して言及がなかったことから人民元は失望売りとなり、豪ドルも連れ安。中国が特別国債を向こう3年間で6兆元発行する可能性との中国メディアの報道が流れると一転して買い進まれた。15日、アジア時間は人民元に連られて下落。米国時間はオランダの半導体製造大手企業の決算への失望に伴う米株売りが重しとなり、豪ドル0.67近辺まで売られた。16日、NZ4~6月期CPIが予想対比下振れでNZドルが売られたのに豪ドルも連れ安。米国時間はセクターローテーションにより反発した米株を背景としたドル高を受け一時週安値0.6659まで下落。17日、予想対比堅調な豪9月雇用統計を受けて豪ドルの買いが進み0.6710近辺まで上昇。その後は米経済指標が予想対比良好だったことから一時ドル買い優勢で豪ドルは下落するも、引けに向けてじり高となった。18日、中国7~9月期GDPが予想対比上振れたことによる人民元高を受けて連れ高。米国株価が過去最高値を更新する中、豪ドルも底堅く推移し0.6707で越週。

今週は動意に欠ける展開を予想。先週はドル高に押されて軟調であったが、今週も豪州では目立った材料が少ない中、他国の動向に振られる展開になると思われる。先週は米株の好調な決算に支えられてドル高が進んだ様相であるが、今週以降も米国の決算が続くが、現状市場は11月FOMCでの利下げを0.9回程度織り込んでおり、これがさらに剥落するとは考えにくく、動きうる方向としてはソフトランディング期待剥落でドル安方向か。30日(水)に豪7~9月期CPIが公表予定であるが、既に公表されている豪7月CPI、豪8月CPIの結果を見ても弱くなりそうな気配は見られない。現状市場では11月のRBAにおいてほぼ据え置き、年内利下げ織り込みについても0.25回程度を織り込んでいるため、来週発表の指標を前に先回りして今週利下げ織り込み続伸や剥落やで相場が動くとは考えにくい。10月頭からの弱気相場は底打ちしたようにも見えるが、0.6650近辺を割り込むことがあればさらなる弱気相場へ突入する可能性を考慮したい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(10/14~10/18)の値動き: (対ドル) 安値 0.6659 高値 0.6750 終値 0.6707
(対円) 安値 99.44 高値 100.95 終値 100.29



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。